

ごあいさつ



歯科医療が超高齢社会に適応し、国民の期待に応える必要があることは自明である。なぜなら、口腔は呼吸や摂食機能を介して命をつなぎ、尊厳や喜びを維持しながら生活を送るために必須の器官であり、この器官の感染や機能不全は生命の危機や生活の質の低下に直結するからである。これだけ超高齢社会において歯科医療の重要性が叫ばれているにもかかわらず、口腔からの感染を防ぎ、口腔機能を維持することが、病床に伏した有病者や要介護者に必須な医療要素であるというイメージを歯科医療関係者が十分共有できないのは、歯学教育を担う我々の責任と言わざるを得ないのではないか。

医療はますます生活や福祉との境界を曖昧にしている。もしも、我々が在宅歯科診療を教育に真面目に含めるのであれば、在宅現場における高頻度の疾患（認知症、がん、誤嚥性肺炎、ロコモティブシンドローム、サルコペニア、低栄養等）の知識はもちろん、摂食嚥下リハビリテーションや食形態、医療保険や介護保険制度に関わる行政法規や倫理規律、多職種との連携、地域包括ケア、死生学やAdvance Care Planning、患者の体位変換や車いすへの移乗、高齢者が住みやすい住居への改装支援、生活・介護支援等、幅広い知識を教育する必要があるだろう。また、人生のステージや全身状況に応じた口腔内の補綴装置等の整理の方法に関する議論や、認知症と診断されたら歯科に受診いただく運動も緒にいたばかりである。一方、高齢者の「食」を基盤とした健康増進、介護予防、虚弱予防の可能性が認識されつつあり、超高齢社会において歯科への期待は高まるばかりである。

本事業は、岡山大学を申請担当大学とした計11大学（北海道大学、金沢大学、大阪大学、岡山大学、九州大学、長崎大学、鹿児島大学、岩手医科大学、日本大学、昭和大学、兵庫医科大学）に、東京大学 死生学・倫理応用センター、東京大学高齢社会総合研究機構、国立長寿医療研究センター、東京都健康長寿医療センターをあわせた歯学教育改革コンソーシアム（平成26年9月26日設立）を中心に、健康長寿社会を担う歯科医師を育てるための文理融合、医科・歯科連携、多職種連携教育改革を実現しようとするものである。

本事業を通して歯学教育改革が実り多いものになりますよう、皆様のご尽力をお願いし、ごあいさつとさせていただきます。

事業責任者

岡山大学大学院医歯薬学総合研究科 インプラント再生補綴学分野 教授
窪木拓男